

暴力論の系譜

——今村仁司とジョルジュ・ソレル——

塚原 史

1. はじめに

今村仁司先生（以下、今村さんと記す）が2007年5月5日、65歳で逝去された。さまざまな意味で同時代の日本の思想界を代表すると言ってよい、この偉大な社会哲学者の早すぎる死についての個人的感慨は、30年来故人と親しく接する幸運を得た者として、別の機会に（図書新聞同年5月26日号掲載の高橋順一氏との追悼対談、『情況』7・8月号「今村仁司の絶筆」など）表明したので、本稿では省略させていただく。

今村さんが帰らぬ人となったとはいえ、その仕事の成果は今なお、生前と変わらぬ、いやそれ以上のペースで、着実にわれわれのもとにとどけられている。私の知るかぎりでも、2007年7月には大著『社会性の哲学』（岩波書店）が出版され、さらに9月には岩波文庫ソレル『暴力論』新訳上巻（塚原と共訳）、10月には旧著の新版『アルチュセール全哲学』（講談社学術文庫）、11月には『暴力論』下巻（塚原と共訳）が刊行され、マルクス「ドイツ・イデオロギー」（麻生博之氏と共訳）・「哲学の貧困」新訳（塚原と共訳、いずれも筑摩書房）の近刊も予告されている。

こうした状況の一環として、長年にわたり今村さんの巨大な知的生産の現場であった東京経済大学で、2007年10月27日に「今村仁司記念シンポジウム」が開催され、さらに本誌で「今村仁司教授追悼号」が編まれることは、故人を偲ぶ喪の作業としてだけでなく、あえて言うなら、今村さんの、マルクスが「フォイエルバッハに関するテーゼ」に書いた意味での「変革」の思想の意味を新たに問うきっかけとして、深い意義をもつと、私は考えている。この場を借りて、東京経済大学の諸先生方に、心より御礼申し上げるものである。

2. ソレル『暴力論』の意味するもの

もっとも、私自身は、直接的には、アヴァンギャルド芸術運動、とりわけダダイズムを中心とする20世紀の表象文化と同時代の思想や社会状況との関連を研究の対象としており、今村さんの社会哲学の仕事からはかなり離れた場所に位置していることを最初に告げておかななくてはならない。したがって、つぎの二つの出来事がなければ、このような場面に登場する

ことはなかったのですが、まずそのあたりの事情をごく手みじかに述べておこう。

最初の出来事は、もちろん1977年、フランス政府給費生としてパリに留学していた時期に今村さんと出会ったことである。詳細は省くが、このときパリ大学ナンテール校で社会学を講じていたジャン・ボードリヤール Jean Baudrillard の『消費社会の神話と構造』*La Société de consommation, ses mythes, ses structures* (原書初版1970年刊) を一緒に訳そうと言っていたことから、今村さんとの共同の仕事が始まった。そのボードリヤール氏も、2007年3月6日に77歳で亡くなられたのは、ある意味で不思議な暗合ではあった。

第二の出来事は、すでにふれたジョルジュ・ソレル Georges Sorel 『暴力論』*Réflexions sur la violence* の共訳を、3年半ほど前に今村さんから提案されたことである。この仕事は、本稿のテーマにつながるものなので、まず翻訳の事情について少しだけ紹介させていただきたい(ソレルについては、東京経済大学教授、桜井哲夫氏の知識人論に、優れた研究がある)。

ソレル『暴力論』フランス語原典の初版は1908年出版だが、日本では、1933年(昭和8年)6月に木下半治氏の翻訳で岩波文庫から出版されたが、全訳としては初めてフランス語原文から日本語に訳出されたものである。昭和8年といえば、2月に小林多喜二が特高に虐殺され、4月には京大滝川事件が起こった年だった。もう70年以上も前の翻訳だが、戦前の治安維持法下で刊行されたこの本には、当然ながら検閲を意識して伏字が非常に多く、その意味では読むに耐えない訳だった(その後、1965年には木下氏による改訂版が出た)。そんな過去を背景にして、岩波文庫が新訳を始めることになり、2004年10月に、今村さんから『暴力論』の新訳を一緒につくろう」という提案を受けた。すでに述べたとおり、今村さんとは、1970年代末からボードリヤールをはじめとして、ブルデュー、リオタールらフランス現代思想の翻訳を数多く共同で手がけてきたし、当時はちょうどミシェル・ヴィノック Michel Winock の大著『知識人の時代』*Le Siècle des intellectuels* (邦訳は紀伊國屋書店から2007年刊) を訳出中で、近代思想史上重要なソレルの著作を現代に蘇らせたい気持ちもあったので、今村さんの提案をお受けすることにした。しかし、翻訳作業が軌道に乗ってきた2006年春に今村さんは体調を崩され、残念ながらその翌年5月に他界されてしまった。ただ分担された訳はほとんど終わっていたから、なんとか出版にこぎつけることができた(上巻には私の「解題」、下巻には今村さんの「解説」が付いている)。

さて、『暴力論』という書物についてふり返ってみよう。初出は1906年の雑誌論文で、先にふれたとおり1908年に単行本になり、その後数回版を重ねるうちに1922年にはソレルが74歳で亡くなるが、著者の死後も『暴力論』は読み継がれ、1950年に第11版まで出ている。さらに1990年になって、テキストは同一だがSeuilから新たな版が刊行されたが、そこには、フランスの政治思想家、ジャック・ジュリアール Jacques Julliard の序文が入っている。1950年代にはフランス全学連UNEFの副委員長で、社会党系の労組フランス民主主義労働同盟CFDTの指導者でもあった人物である。また、フランスでは1980年代にソレル研究の

雑誌 *Cahiers Georges Sorel* が出て十年ほど続き、1986 年には *Cahiers de l'Herne* というマルローやハイデガーなど大作家・大思想家特集で知られた書物の「ソレル特集」が出ている。このように、1980～90 年代にかけて、彼の国ではソレルの思想の再発見がかなり進んでいた。興味深いのは、ソレル再評価と、1982～99 年にフランスで活発な活動を展開した産学協同のシンクタンク「サン・シモン財団」Fondation Saint-Simon の関係である。この財団は歴史家で *Nouvel Observateur* の論客フランソワ・フェレヤ、CFDT 元顧問で、社会科学高等研究院長も務めたピエール・ロザンバロンらが中心となり、企業側からはサンゴバン（ガラス製品素材）やダノン（食品）といった超大企業が参加（出資）していた。*Cahiers Georges Sorel* には、クリストフ・プロシャッソン Christophe Prochasson らこの財団系の筆者の顔ぶれも見られ、もちろん地道な実証研究の雑誌ではあったが、ソレルの思想にある種の視点（おそらく左翼政党と労組の既存のなれあいの関係を批判的に見なおすという視点）から、新たな光をあてようという試みだったともいえよう（この点については、なお検討が必要だ）。

ところで、ソレル『暴力論』がなぜ 1930 年代の日本に紹介されたかについて、旧訳者の木下氏は「ファシズムの理論的究明」¹⁾ のためだと「訳者序」で明言している。つまり、「ファシズムの精神的の父」²⁾ であるソレルの思想を研究することが翻訳の目標になっていたのである。だから最初から偏見といおうか、ある種の方向性を明確にした見地から日本に紹介されていた。戦前には、もちろんムッソリーニの伝記なども出ていて——かつて日本が、ファシストのイタリア、ナチスのドイツと同盟を組んでいたことを想起しておこう——、それらを読んでみると、そこには結構ソレルが登場する。たとえば、大日本雄弁会講談社から 1928 年に出た澤田謙の『ムッソリーニ伝』〔ママ〕には、ムッソリーニがスイスを放浪しているときにソレルの思想に影響を受けたとあり（これは事実である）、ムッソリーニは「ソレル心酔からサンディカリズムへと、心を動かされたものらしい」³⁾ とも書かれていた。さらに、この本には、1922 年 10 月のローマ進軍の際に、ムッソリーニが「暴力は不道德ではない。却って時に道徳である」⁴⁾ と叫んだという記述さえ見つかる。当時ソレルの思想は、ヨーロッパでも日本でも、明らかにファシズムと結びついて解釈されていたわけである。

しかし、今村さんと私で新訳をつくる際には、そういう歴史的偏見ともいえる固定観念から解放された書として『暴力論』を読みなおそうと話しあっていた。ソレルは 1922 年 8 月末、ローマ進軍の直前に亡くなったから、実際にファシズムの運動が権力に到達するのを見てはいなかった。だが、その前の段階で彼の思想は、社会主義、革命的サンディカリズムといっても、すでに反議会主義と反デモクラシーの性格を強めていたので、アクション・フランセーズ Action française のようなナショナリスト的運動と重なり合う面もあり、その意味では（後で今村さんのソレル解釈に関してふれるように）誤読されていたことは間違いないだろう。しかし、「誤読」とはいえソレルの側に原因がないわけではなくて、『暴力論』と彼の思想自体にも、ドレフェス派を擁護しながら「知識人」Intellectuels を批判するなど、ある種の屈

折が感じられるし、キー概念である violence と force に関してもやや混乱したところがある。

『暴力論』第5章(岩波文庫版下巻)の内容になるが、force と violence を定義した有名な箇所がある。引用すれば「人びとは、権力の行為について語る時にも、反逆の行為について語る時にも、強制力(force)と暴力(violence)という用語を使う。この二つの場合が、まったく異なる結果をもたらすことは明らかだ。[...] 強制力は、少数派によって統治される、ある社会秩序の組織を強制することを目的とするが、他方、暴力はこの秩序の破壊をめざすものだといえるだろう」⁵⁾となっている。つまり、権力の秩序を強制するための force と、この秩序を破壊するための violence があると言っているわけである。そのうえで「ブルジョワジーは、近代初頭以来、force を行使してきたが、プロレタリアートは、今や、ブルジョワジーに対して、そして国家に対して violence で反撃している」としている。ここで、violence はアグレッシブな物理的暴力ではなくて、基本的にはゼネストを頂点とする労働者の組織的なストライキのことである。だから、それ自体としてはけっして粗暴な行為ではなくて、むしろ規律ある整然たる行動で、武装蜂起と議会主義のどちらからも距離を置いた革命的サンディカリズムの主要な武器となることができると、ソレルは信じていた。

この定義自体は明快だが、別の箇所では violence と force が混同されている。同じ章のマルクスを論じている箇所で、ソレルは資本主義の諸条件に関する「マルクスの命題を要約」すると言って「最後に来るのが、国家の組織された中央集権的な暴力 violence であり、それは原初の蓄積の歴史にきわめて大きな位置を占め、歴史の主要な目標となる暴力 violence である」⁶⁾と書いていた。ところが、『資本論』第1巻の「資本の原初の蓄積」に関するよく知られた箇所(第7篇24章、フランス語版では31章)の紹介では、最初のフランス語訳(Jules Roy, 1875)を引用した後で「マルクスが強制力 force を助産婦になぞらえて、この力が社会の動きを増大させると述べたのは、まさにこの箇所である」⁷⁾と述べている。つまり、Gewalt の訳語に violence と force の両方が用いられているのだが、(マルクスの引用ではなくて)ソレル自身の文章で violence となっていたことから、Gewalt=violence という発想が彼にあったとも推測できるだろう。

Force と violence の関係についてももう少し述べておけば、当時ゼネストを主張した革命的サンディカリストの労働者たちは労働取引所連盟(Fédération des Bourses du travail)という自治的組織に結集していた。その指導者のフェルナン・ペルーティエ Fernand Pelloutier は、ゼネストを force によって行うという言い方をしている——「ゼネストは平和的運動ではない。force だけが〔ブルジョワの〕資金に勝利することができる」⁸⁾というのだ。しかし、この force は、ソレルのいう権力の強制力としての force ではない。ペルーティエの force はソレルの語法ではむしろ violence である。ただ、ここでペルーティエが violence = 暴力という言葉を使ってしまうと、労働者が暴力行為に訴えたり、武装叛乱を起こす準備をしていると受け取られかねないので、あえてペルーティエは force と言ったのではないか。だから、

そのときペルーティエが使わなかった violence という言葉を、ソレルは労働者側の行為を指して用いたのではないかとも思われるのである。

話がこみ入ってきたが、ソレルの思想の展開は、暴力という社会現象を理性的に解明しようということから始まって、その解明が「神話 (mythe)」という発想にたどり着くことになる。ここで、神話とは、通常の意味合いとは異なり「現実に関与する手段」であり「現代社会に対して社会主義が仕掛ける戦争」つまり「ゼネスト」のイメージの「組織化」である。だから、この意味での神話は「預言」ではないのであり、それが実現するかどうかは偶然ではなく、労働者ひとりひとりのモラルの問題であり、社会を新しい段階へ導くための思想装置としての神話の役割を、ソレルは強調している。その神話に糧を与えるものが violence なのだから、それは物質的な力であると同時に、精神的な力でもあるということになる。この発想には、ベルクソンの「生の躍動 élan vital」の影響を見出すこともできるだろう。ソレルから『暴力論』を献呈された直後の 1908 年 5 月に、ベルクソンは著者への手紙で「暴力に関するあなたの結論は、打ち明けて言うと、私をすこしばかり恐れさせるものです」と書いていた⁹⁾。

したがって、ソレルの神話はいわゆるユートピア思想とは相当かけ離れている。未来社会の幸福な見取り図をプロレタリアートに提示するという意味での空想的ユートピアを、ソレルは退ける。たしかに、過去の神話にはユートピア思想が混ざっていたかもしれないが、それは神話が「過去の経済史にはほとんど通じていなかった社会によって形成されたから」¹⁰⁾であり、今では「経済闘争のうちにユートピアが占める場所などない」というのである。つまり、経済闘争から導き出される「未来」は、ブルジョワジーとプロレタリアートの激突としてのゼネストによって開かれる「未来」であり、空想的なユートピアとはまったく異質なものである。

ところで、私の直接の研究対象であるアヴァンギャルド芸術運動との関連で、ひと言つけ加えておきたい。

イタリア未来派の最初のマニフェストである、マリネッティの「未来派創立宣言」は『暴力論』の翌年 1909 年 2 月に発表されている。『暴力論』初版刊行の数ヵ月後のことである。ソレルのテキストはイタリアの思想誌『社会生成』などに掲載され、この国の知識人や労働運動家のうちに多くの読者を得ていたから、マリネッティが『暴力論』を読んでいた可能性は十分にあっただろう。「未来派宣言」には、よく知られた「速度の美」の提案ばかりでなく、「もはや闘争のなかにしか美は存在しない」とか「われわれは歌うだろう、労働あるいは反逆に煽動された大いなる群衆を」といった、ソレルを思わせる過激な表現が見られるほどで、ある意味で「暴力礼賛」のマニフェストとも言えるのである。

ただ、ソレルは社交的な人ではなく付き合う人の範囲も限られていたので、個人的なレベルで未来派と交流があったとは思えないが、あるいは逆に、1909 年の「未来派創立宣言」は

最初にフランスの大新聞 *le Figaro* に掲載されているから、ソレルがこの宣言を読んでいた可能性もある。未来派がムッソリーニをつうじてソレルの思想を知ったことも、ありえないことではない（グラムシも、初めは未来派に注目していた）。もっとも、未来派は暴力や戦争やテロリズムを賛美するが、その場合の「暴力」は物質的な暴力であり、ソレルの言う意味でのモラルが欠如していて『暴力論』の思想とは異質なものだった。さしあたり、この問題は、興味深い研究テーマになりそうだとっておくことにしよう。じつは、今村さんも「ポップ理性のために」（『現代思想』1984年6月号）でマリネッティと未来派をとりあげていた。

3. 今村「暴力論」と現代

このへんで、今村さん自身の「暴力論」に移ることにしよう。

今村さんは、1970年代後半から『暴力のオントロジー』1982や『排除の構造』1985などを経て遺著『社会性の哲学』2007まで、一貫して社会と暴力の関係への関心を表明し、いわば今村「暴力論」の構築を試みていた。

『ベンヤミンの〈問い〉』1995の「あとがき」では、「一九七〇年代の半ばに私は社会のなかの暴力の問題を社会哲学の問題として受けとめて、暴力現象を生み出す根源的な場面を解き明かそうとしていた」¹¹⁾と回想されていたし、『批判への意志』1983では「私は、現在、労働、暴力、ユートピアを社会研究の三本柱とみなしている」（『補論 暴力論の諸相』）¹²⁾と明言されている。また『暴力のオントロジー』所載の「身体と暴力」では「暴力はすぐれて人間的現象であり、人と人との関係に内在し、つまるところ社会関係にほかならない」¹²⁾と述べられてもいた。

しかし、ソレル『暴力論』についての立ち入った言及は、1995年のベンヤミン論以外にはあまり見られない。『暴力のオントロジー』で取り上げられている暴力は、「社会形成に内在する暴力（荒ぶる力）」¹³⁾であり、支配者の物理的暴力に通じる点では、むしろソレルの言う force に近いものと言える。この著作で今村さんは、レヴィ＝ストロースやバタイユの研究に注目し、未開社会が持っていた「現実的暴力を儀礼的・象徴的暴力に転化させるメカニズム」に注目されていた。つまり「野蛮」なはずの未開社会が、文明社会よりはるかに進んだ「平和作成機関」¹⁴⁾（今村）を備えていたことが指摘されていたのである。とはいえ、その際に興味深いのは「現実的暴力」の箇所が付された注釈に「これは自然史的必然性であって人間の業で除去することは永遠に不可能である」¹⁵⁾と書かれていたことだ。したがって、この時期の今村「暴力論」は、ソレルが violence の概念に託した意志やモラルとはかけ離れた、まさに「荒ぶる力」を土台に構想されていたと考えられる。

この「荒ぶる力」としての暴力と社会の関係をさらに詳細に論じたのが『排除の構造』1985であることは言うまでもない。その序論冒頭で、今村さんは「荒ぶる力は、人間を含む

いっさいの存在者を生かしめる力であり、同時にそれを消滅させる力でもある」¹⁶⁾と、ある種の高揚感とともに書き記していた。さらに、一見暴力を排除するかに思えた近代的理性がむしろ新たな暴力（「ファシズム、ナチズム、スターリニズム」今村）¹⁷⁾を生み出してしまったという逆説が強調されていた。そして、第一部では「暴力の本性」が、第二部では「第三項排除」の暴力が分析的に考察されていて、この書物はまさに今村「暴力論」の中核をなすものと言えるだろう。

ところが、不思議なことに『排除の構造』には、私の知るかぎり、ソレル『暴力論』の引用はもちろん題名も出てこない。ベンヤミンの「神話的暴力」と「神的暴力」の区別に関して、次の箇所にソレルの名前が一度出てくるだけである——「例えば、かれ〔ベンヤミン〕は、ソレルに依りながら「ゼネスト」を「神的暴力」のひとつに加えている。「ゼネスト」を含む革命的闘争は、ベンヤミンの「神的暴力」なのである」。ただ、この言及は必ずしも肯定的なものではなくて、そのすぐ後には、こう続く——「しかし、それは、権力を生産し、「法を措定する」のではないかぎりでのみ、理念としての「神的暴力」になるが、具体的な経験としては、それはほとんど「法措定的」にならざるをえない」¹⁸⁾。この箇所を、先に引用したソレル『暴力論』の用語でパラフレーズすると、ゼネストの「暴力」は理念としては violence だが、経験的には force（権力の強制力）に通じるものになってしまうと読むことができ、ソレルに対する批判とも受け取れる。この時期の今村さんは、どの程度ソレルに接近していたのだろうか。

この疑問へのヒントとなるのが、『理性と権力』1990である。その中の「支配と暴力」（1986 初出）で、今村さんはこう述べていた——「人間にとって暴力が偶然的で非本質的であるとしたら、どのような意味でそうなのかは何もわかっていない。また人間にとって暴力が本質的であるなら、どのような意味でそうなのかについても、何もわかっていない。何もわかっていないからこそ、ひとは楽観することもできるし、暴力に居なおることもできる」。もちろん、今村さんは「暴力が偶然的なもの、人間の社会にとって非本質的で取るに足りないものであるかのように暴力を見る眼」¹⁹⁾を厳しく糾弾するのだが、これを書いた 1986 年の時点で、おそらく今村さんは、十年来取り組んできた暴力と社会の関係について、暴力が本質的なものなのか非本質的なものなのか、そしてそれはなぜなのかと、あらためて問いなおしているわけである。

ところが、ここでもまだソレル『暴力論』は登場しない。それはなぜだろうか、と考えてみたとき、私は、今村さんの暴力概念とソレルの violence 概念との本質的な差異に気づかされることになった。今村さんにとって、暴力とはとりわけ破壊と殺戮の力であって、「われわれが知っているのは、暴力は、精神と身体を、自然よりも病気よりも、迅速に効率よく殺すことができる、という経験的事実のみ」（『理性と権力』）²⁰⁾なのである。他方、ソレルは『暴力論』最終章（第 7 章）を次の言葉で終わらせていた——「まさに暴力（violence）から、社

会主義は高度の道徳的諸価値を引き出さなくてはならない。この道徳的価値によって、社会主義は現代世界に救済をもたらすのである」²¹⁾。そして、その少し前にはこうある——「その助けなしにはけっして道徳が存在しえない熱狂を今日生み出す力(force)はひとつしかない。それはゼネストのためのプロパガンダから生じる力 (force) である」²²⁾ (ここで force とは、もちろんブルジョワジーの強制力の意ではなくて、プロレタリアートのエネルギーの表出としての「力」の意で用いられている)。つまり、ゼネストの熱狂がもたらす崇高感こそが現代的な道徳の源泉であり、ゼネストをつうじた真の社会主義の実現の過程で、高度な道徳的価値が生まれると、ソレルは予見し、期待していたのだった。

今村さん自身がこの差異を認識したのは、もっと以前のことだったかもしれない。しかし、今村さんがソレル原文(邦訳・岩波文庫旧訳)を直接引用して暴力の問題を論じるようになるのは、私の知るかぎり、先にふれた1995年刊行の『ベンヤミンの〈問い〉』からであり、この書物には数十ページにわたってソレルが言及されていることを思い起こせば、その執筆過程で、今村さんはソレル『暴力論』をあらためて精読されたのではないかと思われる。

ここでは、ベンヤミン「暴力批判論」へのソレルの影響が詳細に検討されているが、その際、今村さんは、ソレルの violence 概念を次の6つに分類している²³⁾。

- (1) 意志としての violence (生の飛躍、激しく充実して生きようとする意志)
- (2) 行動のなかでのみ生きる観念としての violence (「神話」、ホメロスの叙事詩)
- (3) 創造する力としての violence (「自由な人間」を創造する力、努力)
- (4) モラルとしての violence (自己犠牲、献身、ヒロイズム)
- (5) 労働あるいは生産としての violence (生命の飛躍の先鋭的表現としての労働)
- (6) 徳 (vertu) としての violence (革命的ゼネストで発揮される人間的徳=勇氣)

以上の分類は、必ずしもソレル原文どおりではないが、物理的力や権力の強制力 (force) とは次元の異なる概念として violence を再評価しようという試みとして、意味深いものである (この分類は岩波文庫版『暴力論』新訳下巻「解説」中でも、ほぼそのまま繰り返されている)。『排除の構造』で、今村さんはゼネストの violence が権力の force に変化するものの危険性を指摘していたが、このベンヤミン論中でも「violence は、物理的強制力という意味での暴力すなわち force を解体する力なのである。まさにこの論点が、すでに自己の歴史哲学の構想を確立していたベンヤミンと共鳴しあう」²⁴⁾ と述べられていた。その上で、「ベンヤミンは、ソレルのプロレタリアゼネスト論を読み、そこにある非暴力的な内容が彼の神的ゲヴァルトの内容と一致すると判断したのであろう。[...] ベンヤミンのソレルの読み方のみが正しいのであり、ファシストやボルシェヴィストなどのソレル読解、それに影響されたその後のソレル像はすべて誤解というほかはない」²⁵⁾ と言い切っている。ソレルの暴力概念を精神的な領域に属するものとしてとらえようとするこの見解は、死後出版となった『社会性の哲学』でも繰り返されており、ここでは「ソレルの暴力は、ベルグソンのエラン・ヴィタル、

ニーチェの《力への意志》に近い一種の精神的・モラル的力であった」²⁶⁾と書かれていた。

ベンヤミン自身の言葉を引用すれば、「プロレタリア・ゼネストがひきおこしかねない破局を考えてこれに暴力という烙印を押したがるような考えは、どんな考えであれ、とるにたらない。[...] 効果のみを目に留める国家は、まさに非暴力的なプロレタリア・ゼネストをこそ [...] 暴力呼ばわりして、これとまっこうから対峙してくる」²⁷⁾ (『暴力批判論』52p) となる。しかし、ソレル自身には実力行使を伴わない「非暴力的」ストライキという発想はなかった。『暴力論』初版出版のわずか11日後(1908年5月18日)に発表された評論「暴力の弁護 Apologie de la violence」(付論II)で「暴力 violence の弁護なしには社会主義は生き延びることはできない」と断言したソレルは、さらに続けてストライキはひとつの戦闘現象だと言い、「暴力 violence がストライキから消え去るよう定められている偶発的現象だというのは、ひどい嘘をつく危険を冒すこと」²⁸⁾ だと、あえてつけ加えてさえいたのである。

ここで述べられている「暴力」を先ほどの今村さんの6つの概念のどれかにあてはめることは、おそらく困難だろう。というのも、この暴力は「労働組合のなかでプロレタリアートが不断に準備している社会戦争」²⁹⁾ へといたる戦闘の一環であり、意志や情熱や道徳といった抽象的な概念ではないからだ。たしかに、ソレルは別の箇所(第4章)で「ゼネストとは、社会主義全体を包みこむ神話」だと書いていたが、そのすぐ後から(神話は)「つまり、現代社会に対して社会主義が仕掛ける戦争の多様な表れに対応するあらゆる感情を、本能的に呼び起こすことが可能なイメージの組織化である」³⁰⁾ と言い換えていた。

それでは、ベンヤミン=今村さんのソレル理解が一方的だったのか、あるいはソレル自身が混乱していたのだろうか。この難問に容易に答えられるわけではないが、ひとつの前提として、ソレルの考える「暴力 violence」の概念を整理しておこう。煩雑になるので引用は控えるが、彼のいう violence が辞書の定義どおりの「物理的力の濫用 (abus de la force)」でも「誰かを服従させるための粗暴な力 (force brutale pour soumettre quelqu'un)」 *Grand Robert* でもないことはたしかである。そうした意味の violence が支配者の暴力であることを、ソレルはフランス革命の例を引いて詳しく述べていた。その意味では、プロレタリアートの violence を「非暴力」と表現してもよいかもしれない。しかし、ソレルの violence が、社会戦争の兵士たるプロレタリアートの戦闘の力であることも事実で、彼らはこの戦争で当然命を落とす覚悟なのだ。こちらの意味では「非暴力」とは言えない。「暴力の弁護」の末尾で、ソレルは革命的サンディカリストをナポレオン軍の兵士に例えて、こう書いていた——「ナポレオン軍の兵士たちは、どれほど功績をあげてもいつまでも貧しいままにちがいないと自覚しながらも、あれほど多くの武勲をあげたものだが、その兵士の軍隊に匹敵するのが、革命的サンディカリズムであるだろう。ナポレオン帝国から残ったものは何か。偉大な軍隊の叙事詩だけである。現在の社会主義運動から残るであろうもの、それはストライキの叙事詩であるだろう」³¹⁾。

先を急ごう。今村さんは、1980年代までの「破壊と殺戮の力」としての「暴力」概念を問いなおす過程で、ベンヤミンをつうじてソレル『暴力論』に再接近し、そこに「残忍な強制力」としてのブルジョワジーの力の行使 force をプロレタリアのゼネストの暴力 violence、つまり戦闘の力で解体するという意味での「非暴力」の思想を見出したのではなかっただろうか。ところが、その際「戦闘の力」としての violence のほうを、直接行動つまり実戦の力というよりはむしろ、意志やモラルや神話といった思想や感性として解釈したために、「ベンヤミンのソレルの読み方が正しい」という断言によって、いわば「実力行使」としてのゼネスト理解から遠ざかってしまったとも考えられるのである。あるいは、この「断言」をつうじて、今村さんはソレルを、サルトルがファノン『地に呪われた者』序文で表明した「ファシストソレル」³²⁾ という不名誉な「誤読」から救い出そうとしたのではなかっただろうか。

ソレルと社会戦争に関する私の解釈は、必ずしも独断というわけではない。先ほどふれたフランスの思想家、ジャック・ジュリアルが2007年3月に来日した折に、彼と話す機会があったが、「ソレルにとって暴力とは何だったのでしょうか」と尋ねると、彼は、ソレルはマルクス派として、社会主義の発展を階級対階級の戦争として構想していたから、暴力とは個人的なものではなくて、新しい社会をつくるための戦争の原動力だと考えていただろう、と答えてくれた。『暴力論』を読めばすぐわかるように、ソレルは、ブルジョワジーが衰退してくるとこの階級対階級の激突の感情が失われ、プロレタリアートに対して融和的、妥協的になるが、それでは真の社会革命は起こらないと信じていた。彼は、勝ち誇ったブルジョワジーと強力なプロレタリアートの激突、真剣勝負によって新しい歴史がつくられると本気で信じていたのである。

しかし、その後の世界は、ソレルが想像し、期待したような展開にはならなかった。社会主義がロシア型の現実となって収容所と粛清の舞台と化し、ムッソリーニとヒトラーによる社会の「実験」はあまりにも残酷で悲惨な結末を迎えてしまった。まさに「破壊と殺戮の暴力」が支配したのである。そして第二次大戦後は、消費社会という「実現されたユートピア」(ボードリヤール)の発展によって、ゼネスト的暴力(モラルをもたらず violence)による新しい社会の構築という方向はほとんど見えなくなったというほかはないだろう。そのような状況の中で、われわれがソレルから今後何を読み取っていくかが、まさに問われている。「暴力とは何か」という最初の問いに立ち戻ることが重要であると言うほかはない。

結局、暴力とは非常に日常的なことがらでありながら、『理性と権力』中の今村さんの言葉どおり、意外に規定し難いものである。ソレルの用語を使えば上からの force (強制力) と下からの violence (暴力) の関係が、とりわけ9・11以後大きく変化して、一方では管理社会・監視社会の過剰な展開によって force が体制維持のための強大な抑止力として機能し、

とりわけ私たちの国では、労働現場や街頭や大学のキャンパスから意思表示の行動としての violence が姿を消しつつある一方で、force の行使が多分化、多様化して、たとえば最近の身近な例で言えば、相撲部屋での新入力士への死にいたる暴力や、ミャンマーで日本人ジャーナリスト（東経大卒業生、長井健司氏）を射殺した暴力、あるいは無抵抗な子どもを刺し殺す暴力など、強者からの残忍な暴力が弱者へと向かっていく傾向があると思われる。ソレル的プロレタリア暴力の消滅あるいは希少化と、モラルなき粗暴な「暴力」の過剰が、同時に進行しているわけである。

こうした状況のもとで、強者が弱者に対して行使する残虐な暴力に対抗する「力」を弱者が個人レベルで構想するとしたら、それはやはり物理的な暴力になってしまうだろう。そうなることを、ソレルは恐れていたのかもしれない。モラルなき暴力は、ソレルのいうプロレタリア暴力ではありえない。しかしモラルのない暴力のことを、われわれはごくあたりまえに暴力だと思いこんでしまっている。こうした事態を前にして、なぜ一世紀前に、ソレルが暴力とモラルの問題をあえて論じたのか、そしてなぜ今村さんが30年にわたって暴力の考察をご自身の研究の柱のひとつとされたのか、私たちに残された宿題はあまりにも大きいと言わなくてはならない³³⁾。

注

- 1) ソレル『暴力論』旧訳改訂版（木下半治訳，岩波文庫旧版上巻，1965年），7ページ。
- 2) 同上書，8ページ。
- 3) 澤田謙著『ムッソリニ伝』（大日本雄弁会講談社，1928年），91ページ。
- 4) 同上書，312ページ。
- 5) ソレル『暴力論』新訳（今村・塚原訳，岩波文庫下巻，2007年），53ページ。
- 6) 同上書，55ページ。
- 7) 同上書，57ページ。
- 8) Pelloutier, Girard, *Qu'est-ce que la grève générale?* 1895. (<http://www.pelloutier.net>)
- 9) *Cahiers Georges Sorel*, no.1, 1983, p. 121.
- 10) ソレル『暴力論』新訳（今村・塚原訳，岩波文庫上巻，2007年），217ページ。
- 11) 今村『ベンヤミンの〈問い〉』（講談社，1995年），270ページ。
- 12) 今村『暴力のオントロジー』（勁草書房，1982年），212ページ。
- 13) 同上書，151ページ。
- 14) 同上書，152，154ページ。
- 15) 同上書，152ページ。
- 16) 今村『排除の構造』（青土社，1985年），8ページ。
- 17) 同上書，11ページ。
- 18) 同上書，32ページ（〔 〕内は筆者）。
- 19) 今村『理性と権力』（勁草書房，1990年），38，39ページ。
- 20) 同上書，41ページ。

暴力論の系譜

- 21) ソレル『暴力論』新訳下巻，前出書，200 ページ。
- 22) 同上書，199 ページ。
- 23) 今村『ベンヤミンの〈問い〉』，前出書，150，151 ページ。
- 24) 同上書，151 ページ。
- 25) 同上書，163 ページ。
- 26) 今村『社会性の哲学』（岩波書店，2007 年），286 ページ。
- 27) ベンヤミン『暴力批判論』（1920 - 21 年，邦訳，野村修訳，岩波文庫），52 ページ。
- 28) ソレル『暴力論』新訳下巻，前出書，251，252 ページ。
- 29) 同上書，253 ページ。
- 30) ソレル『暴力論』新訳上巻，前出書，221 ページ（強調はソレル）。
- 31) ソレル『暴力論』新訳下巻，前出書，255 ページ。
- 32) サルトル「ファノン『地に呪われたる者』への序」（1961 年，邦訳，海老坂武訳，『ファノン著作集 3』，みすず書房），10 ページ。
- 33) ソレル『暴力論』は，ベンヤミン=今村さんの言う「非暴力」の称揚としてよりは，むしろ労働者の直接行動としての暴力の擁護として読まれ続けている。フランスで 1981 年に『暴力の歴史』*Histoire de la violence* (Robert Laffont) を刊行したジャン=クロード・シェネー Jean-Claude Chesnais はストライキを「集合的暴力」の項に分類して，19 世紀には労働争議で多くの死傷者が出たことを示したうえで，「プロレタリアートの攻撃性を称揚して，ジョルジュ・ソレルは，暴力が「文明のもっとも重要な利害に奉仕する……じつに美しく，英雄的なもの」であると書いていた」と述べている。この箇所は『暴力論』第 2 章からの引用だが（岩波文庫新訳上巻，162 - 163 ページ），2004 年にパリで出版されたミシェル・ヴィヴィオルカ Michel Wieviorka の大著『暴力』*La Violence* (Balland) にも同じ箇所が引かれており，ヴィヴィオルカは「ジョルジュ・ソレルのアプローチは，社会運動，すなわち彼の時代に現れつつあった紛争にひとつのイデオロギーを提示することはあっても，定着し構造化された関係としての紛争を考える手がかりにはまったくならない」（邦訳，田川光照訳，新評論，2007 年刊，46 ページ）と断定していた。こうした発言は，今村さんの読解からすれば明らかに「誤読」ではあるが，そのような傾向がすでに定着してしまったことは事実であり，ソレルの言説自体がそれに力を貸したこともまた否定できないだろう。2007 年 2 月脱稿の『暴力論』新訳「解説」の末尾で，今村さんは「われわれの新訳によってソレルの主著があるがままに理解され，現代の社会と政治を考える重要な著作として蘇ることを期待する。このささやかな解説が，ソレルを誤読と曲解から救済する一助になれば幸いである」（岩波文庫下巻，305 ページ）と記していたが，その願いが実現するための道はまだまだ険しそうである。